

## 図書紹介

**Handbook of Nuts** (ナッツハンドブック) Jams A. Duke 著, CRC Press, 2000, pp. 343 ISBN 0-8493-3637-6

Nuts は通常堅果と訳され、乾燥して果皮が硬く、裂開せず、普通は 1 個の種子から成る (時に数個含む) 果実を総称するが、この本ではそれ以外の通称ナッツと称される果実及びそれに近い果実を着ける植物 109 種について解説されている。その半数近くは、狭義の Nuts ではない。また、同じく nuts と称しても peanuts のようなマメ科の果実 (鞘果) は含まない。これは姉妹版である “Handbook of Legumes of World Economic Importance” (J.A. Duke, Plenum Press, 1981) に掲載されている。本書で取り上げられている種のほとんどは木本植物であるが、一部にヤブマメ (Hog peanut), ホドイモ (Groundnut), グアイ (Water nut), ヒマワリなども含まれている。また、ヤシ科植物が十数種含まれている。さらには、堅果とは程遠いジャックフルーツやパンノキなども含まれている。

学名のアルファベット順に 109 種が取り上げられ、用途、民間医薬、化学成分、植物形態、原産地、分布、生態、栽培、収穫、収量と価格、生産性、生物因子 (病虫害) などの項目について、1 樹種について 3~4 ページの解説がされている。ちなみに、アブラギリの仲間クイノキ (*Aleurites moluccana*, 通称 Candlenut Oil Tree, Candleberry, Vanish Tree, Lumbang Oiln 等) についてその概要をみてみよう。

用途: 種子油は 57~80% の非食用、半乾性油、常温で液体、 $-15^{\circ}\text{C}$  で固体化し、Oleostearic 酸に富む。防腐・塗料、ワニス、石鹼、耐水紙などに利用。果実は毒性あり、魚獲に利用。民間医薬: 中国、マレーシア、フィリピン、インドなどでの利用例を記載。中国、日本では腫瘍に効くという。化学成分: 各種有機・無機の成分含量を記載。形態: 木の大きさ、樹形、葉形、花や果実の形など、植物形態書と同じ。原産地と分布: インドシナ・インドネシア中心、東南アジアに広く分布。中南米にも移入されている。生態: 生育可能範囲の年平均気温、雨量、土壌 pH など。栽培: 種子で増殖する。300 本/ha 程度植林し、一旦成林すればその後手間はかからない。収穫: 毎年 1 短枝に 2 果生産。収量と価格: ha あたり 5~20 トン、1 本当たり 30~80 kg の堅果を産する。油含有量は堅果重量の 15~20%。地元消費のため、輸出統計はないが、以前イギリスで、この油はトン当たり 12~14 ポンド。生産性: Nut 収量とそれからの油収量、果実収量、他の植物油との収量・価格の比較。生物因子: 本樹種を害する病害菌の学名一覧: 以上がおおよその記載内容である。

近年、途上国においては、住民参加による森林造成及び管理が主流となりつつある中で、果樹類や換金樹種の植林要望は大きい。植林から収穫までに長年月間の収入源の確保と住民の生活安定は、森林の長期安全な育成管理に欠かせない要件でもある。本書で述べられている対象種の多くは熱帯から亜熱帯産が中心であり、この地域が活動の中心である本誌読者には有用な解説書といえる。

(森 徳典)